

論文

幌内炭鉱をめぐる追想の布置連関
－資本の本源的蓄積と産業遺産－

The Constellation of Remembrances on Horonai Coal Mine:
The Primitive Accumulation of Capital and the Industrial Heritage

古松 丈周
Takenori Komatsu

Abstract

This paper aims to clarify the relationship between the negative remembrance and Horonai coal mine which is Japanese Heritage "Tantetsukou". "Forced labor" becomes one of causes of "Dark coal mine" images since "Forced labor" means "prisoner labor", "Tako-Beya labor" or "forced entrainment of Koreans and Chinese labor" in the primitive accumulation of capital context. The primitive accumulation of capital is not merely one stage on historical steps, but it exists in the periphery area of the capitalist society at all times. On the other hand, when it comes to the industrial heritages, we will obliterate the negative side of the accomplishments of modernization and industrial revolution. Therefore, at present, the victims in origin who got involved in the modern system were exactly backward to what they were, and came to be considered as a person who contributed to the modernization of Japan. These remembrances, however, are not of theirs. Their hope was far beyond resistance. As far as the modern people are concerned, everyday life has become a matter of formality. We should think that both "closely related but tightly knit community" and mutual aid in "Tomoko-system" are the authenticity that tourists seek for the coal miners' real life.

Key words: Horonai Coal Mine (幌内炭鉱)、industrial heritage (産業遺産)、primitive accumulation of capital (資本の本源的蓄積)、dark tourism (ダーク・ツーリズム)、tourist gaze (観光のまなざし)

目次

はじめに

第1章 不自由な労働者たち (1): 空知集治監

第2章 不自由な労働者たち (2): タコ部屋

第3章 産業遺産のストーリー

第4章 産業遺産へのまなざし

おわりに

はじめに

2007年、北海道夕張市の財政破綻が大きく報道された。その後、10年以上経過した2019年4月24日、『日本経済新聞 電子版』にはこうある。「1990年代以降はすっかり珍しくなっていた「自治体の財政破綻」が平成も後半にさしかかった2006年、高級メロンで全国に知られていた北海道夕張市で起きた。石炭産業から観光重視への転換に失敗。収支悪化を取り繕うために重ねた多額の借金が表面化し、ついに行き詰まった」。記事は、平成を振り返り全国唯一の財政再生団体である夕張市を「自治体受難の象徴」という。自治体の受難とは、「バブル崩壊や金融危機による税収減に加え、少子高齢化によるコスト増が自治体財政を直撃」したことを指している¹⁾。夕張市の財政破綻は、日本経済と社会の変容、地域の疲弊を象徴的に示しているのである。夕張市石炭博物館の館内展示には、「全国最低の行政サービスと全国最高の市民負担」と表現されている。

夕張市を含め、札幌と旭川の間地域は空知と呼ばれる。かつて、この地域は石炭産業を中心に栄えた。1872年〔明治5年〕、北海道開拓使に招かれたライマン (Lyman, Benjamin, Smith: 1835-1920) による地質調査から、空知地方に広がる日本最大の炭田、石狩炭田の発見に至った。地質構造の違いから、北部を空知炭田、南部を夕張炭田と分けることもある。1879年〔明治12年〕官営幌内炭鉱 (三笠市) が開鉱し、その後いくつもの炭鉱が開鉱した。その石炭は、日本の近代化、戦後の高度経済成長を支えたが、1960年代以降エネルギーが急速に石油に移るようになると、炭鉱は段階的に閉山することを余儀なくされた。その後、日本は脱工業化の時代を迎えることになる。細々と続いていた炭鉱も次々と姿を消してゆく。そしてついに1995年〔平成7年〕、空知炭鉱 (歌志内市) の閉山により空知地方は産炭地としての歴史に幕を下ろしたのである。

低成長期に入り、製造業による経済成長を望めなくなった現在、多くの疲弊した地域が観光に活路を見いだそうとしている。炭鉱の閉山後、衰退する旧産炭地域はその雛形ともいえるだろう。空知の旧産炭地域 (夕張市・芦別市・赤平市・三笠市・歌志内市・上砂川町) も観光重視への転換²⁾を図っており、近年では炭鉱遺産を観光資源として地域振興を図る取り組みを続けている。空知地方の炭鉱遺産は、2001年〔平成13年〕10月22日に「空知の炭鉱関連施設と生活文化」と題して北海道遺産に選定された³⁾。また、2007年〔平成19年〕には「我が国の近代化を支えた北海道産炭地域の歩みを物語る近代化産業遺産群」として近代化産業遺産⁴⁾に、さらに2019年〔令和元年〕に日本

1) 『日本経済新聞 電子版』「夕張市「再建団体」に転落、自治体受難の象徴に」<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO44147970U9A420C1L41000/> (2021年9月25日閲覧)。

2) 夕張市の破綻の一因も前述のように観光重視への転換の失敗にあった。1980年代以降、夕張市は観光開発を行い、博物館の他にも大遊園地、ホテル、スキー場などを開発した。バブル期の1990年には「活力あるまちづくり優良地方公共団体」として、自治大臣から表彰されている (cf. 辻道雅宣「夕張市の財政破綻の軌跡と再建の課題」地方自治総合研究所『自治総研』36 (10)、2010年10月、pp. 63f.)。

3) 北海道遺産「空知の炭鉱関連施設と生活文化」https://www.hokkaidoisan.org/sorachi_tanko.html (2021年10月2日閲覧)。

4) 経済産業省『平成19年度 近代化産業遺産群33：近代化産業遺産が紡ぎ出す先人達の物語』25-28頁、https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/mono/creative/kindaikasangyoisan/pdf/isangun.pdf (2021年10月2日閲覧)。

遺産に認定された「本邦国策を北海道に観よ！～北の産業革命「炭鉄港」～」の構成文化財となっている⁵⁾。

本稿の課題は、この空知を代表する炭鉱遺産のひとつ、幌内炭鉱とそれにかかわる遺産の観光地化、さらにその表象をめぐる布置連関を幌内炭鉱の歴史を辿りながら検討することである。炭鉱、さらに炭鉱を含めた産業遺産の観光資源化については、十分とは言えないまでも研究が蓄積されてきた。産業遺産については伊東による概説があり⁶⁾、また炭鉱の観光資源化をめぐる「軍艦島」を対象とし、その表象のポリティクスを検討した木村至聖による優れた研究がある⁷⁾。また木村による空知地方の朝日炭鉱をテーマとして「炭鉱の暗さ」を検討した研究も存在している⁸⁾。本稿ではこれらの研究を参考にしつつ、幌内炭鉱について検討することになる⁹⁾。

幌内炭鉱の開鉱は近代炭鉱開発の始まりを告げるものであり、この炭鉱を起点として、上述した日本遺産の「炭鉄港」が形成された。幌内炭鉱の労働力を確保するために集治監が設置され、その石炭を輸送するために鉄道が敷設され、海上輸送のための港が整備された。こうして後に観光資源とされる一連の産業遺産が形作られたのである。このような産業遺産の特性として、木村至聖は「時間の近接」、「集会的記憶」、「表象のポリティクス」をあげている。産業遺産は近代に入ってから建造された施設が多く、経営者、労働者、近隣住民など多様な社会層の集会的記憶に関わり、ある表象が専門知と結びついて特権化されると、異なる経験や集会的記憶を持つ人々との間に葛藤や対立を生み出しうるのである¹⁰⁾。なかでも炭鉱産業は、近代化を支える基幹産業であると同時に、近代化の影を示すものとして語られてきた。幌内炭鉱で育ち、炭鉱遺産の保全・活用に関わる吉岡宏高は、炭鉱の典型的なイメージを、「いちはやく忘れ去りたい、悲しくて辛い「負の記憶」しかない……」ものであり、それをまぎれもない事実としている。しかし、そのような表象に対して、「歴史のある一時期、ある地域の断片的な姿でしかないことを知っている人は少ない」と指摘し、「炭鉱も暗いだけでなく、確かに明るい部分があった」という¹¹⁾。一面的ともいえる炭鉱の暗いイメージを相対化し、かつてそこにあった人々の生活を語り継ごうとする試みである¹²⁾。

5) 日本遺産 ポータルサイト「本邦国策を北海道に観よ！～北の産業革命「炭鉄港」～」<https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/stories/story068/index.html> (2021年12月21日閲覧)。

6) 伊東孝『日本の近代化遺産』岩波新書、2000年。

7) 木村至聖『産業遺産の記憶と表象：「軍艦島」をめぐるポリティクス』京都大学学術出版会、2014年。

8) 木村至聖『生活戦略からみる炭鉱社会像の再考：北海道岩見沢市朝日町における「出面取り」の事例から』『甲南女子大学研究紀要 人間科学編』49号、2012年。

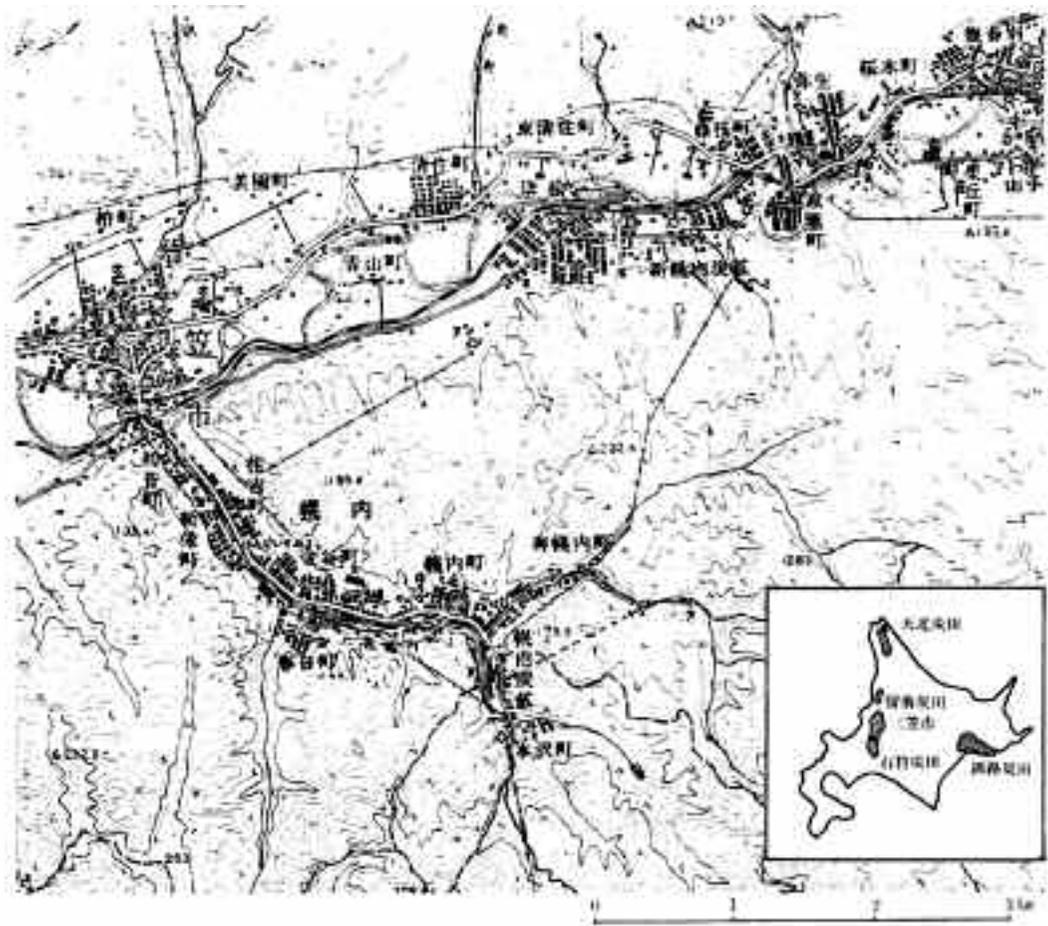
9) 幌内炭鉱の観光資源としての研究とは異なるが、「まちづくり」、「場のマネジメント」に焦点を当てたものとして、この活動にかかわる吉岡の研究がある。吉岡宏高『炭鉱遺産でまちづくり：幌内炭鉱の遺産を主題とした「場」のマネジメント』富士コンテム、2005年。

10) 木村至聖『産業遺産：近代の文化遺産としてのポリティクス』、木村至聖、森久聡編『社会学で読み解く文化遺産：新しい研究の視点とフィールド』新曜社、2020年、123頁。

11) 吉岡宏高『明るい炭鉱』創元社、2012年、1～5頁。

12) 炭鉱を多様な視点から検討したものとして、以下を参照されたい。なお、戦後日本を対象としたものである。中澤秀雄、嶋崎尚子編著『炭鉱と「日本の奇跡」：石炭の多面性を掘り直す』青弓社、2018年。

以下では、吉岡の言う「歴史のある一時期、ある地域の断片的な姿」がなぜ炭鉱の典型的なイメージとなりえたのか、「炭鉱も暗いだけでなく、確かに明るい部分があった」というとき、暗い部分と明るい部分を分けたものは何だったのか、そして炭鉱遺産が観光資源となる文化的社会的意義を産業遺産の特性とともに検討する。まず、炭鉱の暗い部分が何よりも労働をめぐって表象されている以上、近代の労働のあり方について検討する必要がある。とりわけ、明治期から第二次大戦にかけて炭鉱の過酷な労働は、その後の炭鉱イメージを決定する大きな要素のひとつになったと考えられる。さらに北海道では、植民地化という問題が影響を与えることになる。マルクスのいう「資本の本源的蓄積」期に、北海道の幌内炭鉱でどのような労働が行われたのかを歴史研究をもとに整理したい。次にいわゆる炭鉱イメージが成立する背景について検討する。炭鉱遺産の表象をめぐるポ



幌内炭田位置図¹³⁾

13) 北海道開拓記念館編『明治初期における炭鉱の開発：幌加内炭鉱における生活と歴史』北海道開拓記念館調査報告、第7号、1974年3月、3頁より。

リティクスには、自らの体験、記憶、そこに見出そうとする歴史的意義の相違、あるいはナショナリズム、そして現在においてその遺産をどのように活用するのか、その目的などが存在している。そして最後にこの歴史を観光資源とすることが何を意味するのか、現代をどのように捉えようとしているのか、その意味を検討したい。

第1章 不自由な労働者たち（1）：空知集治監

幌内炭鉱は、石狩炭田南部の夕張炭田北端に位置し、現在の北海道三笠市にかつて存在した炭鉱である。1879年〔明治12年〕、大坑道（後に音羽坑と呼ばれる）が開削され炭鉱として開山しており、北海道における本格的な炭鉱開発の基礎となるものであった。

この初期の開発で労働力の確保は大きな問題であった。幌内炭鉱の労働力についてはこれまでも研究が蓄積されてきた。本稿の目的とする資本の本源的蓄積との関係、労働の実態についても、ある程度のこと明らかにされている。北海道開拓記念館の調査報告¹⁴⁾では、断片的な資料からではあるものの、初期の炭鉱開発の労働力について明らかにされており、とりわけ1882年〔明治15年〕以前の労働力の導入について検討されている。また、本稿の課題となる1883年〔明治16年〕以降投入される囚人労働をはじめとする労働形態については、この調査報告とともに、田中修の研究¹⁵⁾がある。また、『北海道開拓殉難者調査報告¹⁶⁾』は、北海道開拓における過酷な労働について、様々な資料を教えてくれる。これらの成果を参考にしつつ、幌内炭鉱の労働力をめぐる問題を検討したい。

北海道の炭鉱は、幕末、外国船の燃料を補給すべく石炭を調達する目的で始まった。1857年〔安政3年〕に白糠炭山、1864年〔元治元年〕には芽沼炭山が開坑した。その後、明治維新を経て、近代化を急ぐ明治政府のもとで本格的な炭鉱開発が始まることになる。その最初の炭鉱となるのが幌内炭鉱である。しかし、その開発は容易に進むものではなかった。当時の北海道は「開拓」が始まって間もない時期であり、炭鉱開発にはそれにかかわるインフラ整備も含めて多くの労働者が必要となる。それに対して、明治初期、日本の資本主義化は始まったばかりであり、いわゆる「資本の本源的蓄積」期にあたる。それゆえ、「資本の本源的蓄積」とともに進む農民層分解も不十分であり、労働者を確保するには資本主義的な賃労働とは異なる方法が必要となる。特に北海道は人口の稀薄な植民地であり、労働者を確保するのに移住者に頼らざるをえない。それゆえ、「本土」以上に労働者を確保するのは困難であった。歴史的な段階とともに植民地という問題が大きく影響していたのである。その結果、田中が指摘するように、北海道の労働力供給は、一貫して強制的労働に負うこ

14) 同上書。

15) 田中修『日本資本主義と北海道』北海道大学出版会、1986年。

16) 北海道総合文化開発機構『北海道開拓殉難者調査報告』1991年。

とが大きかった¹⁷⁾。アイヌ、屯田兵、囚人労働、タコ部屋、納屋制度、朝鮮人、中国人の強制労働、北海道の近代化、工業化は強制労働によって支えられていたのである。

ここで「資本の本源的蓄積」について説明が必要であろう。「資本の本源的蓄積」とは、資本主義が成立する条件としての「資本」が発生する歴史的過程をいう¹⁸⁾。この過程で、生産手段を資本に転化し蓄積を進める資本家が生まれ、他方で、人口の大多数を占める農民の多くは生産手段から引き離され賃労働者に転化する。つまり、生産手段を有する資本家と「二重の意味で自由な労働者」という階級が成立するのである。そしてこの過程において、大きな役割を果たすのが暴力である。暴力により農民は生産手段から引き離されて賃労働者に転化せざるをえなくなる。しかもこの暴力による過程は、資本主義成立期の一過性の歴史的過程ではなく、資本主義が拡大再生産されるなかで繰り返されるものである。ローザ・ルクセンブルクのいう非資本主義的な「外部」に、すなわち資本主義が拡大し、非資本主義と接するところに常に存在しているもので、デヴィッド・ハーヴェイのいう「略奪による蓄積」にも通じるものである。ハーヴェイはルクセンブルクを参照しつつ、資本蓄積の二重の性格を指摘している。資本蓄積のひとつの側面は、資本家と賃労働者との間の取引であり、形式上は平穏と財産と平等が支配している。もうひとつの側面は、資本主義と非資本主義的生産様式との関係に関わるもので、植民政策、国際的な融資制度、戦争という方法が採用される。強制、詐欺、抑圧、略奪が隠蔽すらされず公然と行われ、政治暴力と権力闘争のなかで経済的プロセスを律する法を見出すのが困難な蓄積である。そしてこれらふたつの側面は有機的に結びついている¹⁹⁾。ルクセンブルクによれば、「植民地諸国においては、近代的な賃金制度と本源的な支配諸関係との極めて奇妙な混合形態が生じる²⁰⁾」のである。

この資本蓄積のもうひとつの側面こそが、第二次大戦前の北海道における炭鉱産業、そして工業化を支えた労働力の成立過程を表すものなのである。資本主義的生産様式における賃労働者、すなわち「二重の意味で自由な労働者」ばかりではなく、暴力的な強制が公然と行われる、いわば「不自由な労働者」が北海道の道路開削などの土木工事、鉄道敷設をはじめとする過酷な開拓事業、インフラ整備を、そして炭鉱産業を含めた鉱山などの産業を支えたのである。そしてこの「不自由な労働者」に支えられて、日本の近代化、工業化は進められたのである。

幌内炭鉱において、この「不自由な労働者」で注目されるのは、第一に囚人労働である。明治初期、社会の混乱により重罪犯が急増し、さらにその一方で、士族の反乱で国賊としてとらえられた

17) 田中、前掲書、94頁。

18) 「資本の本源的蓄積」論の意味については、以下を参照されたい。cf. 植村邦彦『隠された奴隸制』集英社新書、145頁以下、植村邦彦『ローザの子供たち、あるいは資本主義の不可能性:世界システムの思想史』平凡社、2016年、25頁以下。

19) デヴィッド・ハーヴェイ (本橋哲也訳)『ニュー・インペリアルイズム』青木書店、2005年、139-140頁。

20) ローザ・ルクセンブルク (小林勝訳)『資本蓄積論—— [第三分冊:第三篇 蓄積の歴史的諸条件]』御茶の水書房、2013年、56頁

幌内炭鉱をめぐる追想の布置連関－資本の本源的蓄積と産業遺産－

者、自由民権運動の政治犯などが多数存在した。社会的、そして政治的混乱のなかで多くの囚人が生み出されたのである。そしてその囚人達を北海道の集治監に送り、「二重の意味で自由な労働者」では行いえない過酷な労働に使役したのである²¹⁾。その背景には、伊藤博文の「集治監一石三鳥論」、山縣有朋の「苦役本分論」、そして金子堅太郎の「三県巡視復命書」に見られる囚人労働による資本の導入という考えがあった。北海道を囚徒流刑地とし、懲戒苦役によって再犯を防止し、そしてついに、囚人を北海道開拓の使い捨ての低廉な労働力としたのである²²⁾。1881年〔明治14年〕に樺戸集治監が設置されたのを皮切りに、矢継ぎ早に集治監が設置されてゆく。囚人達は、道路開削、開墾、そして鉱山開発などで使役され、多数の囚人が過酷な労働のなかで犠牲となった。その中のひとつが幌内炭鉱での囚人労働なのである。1882年〔明治15年〕に空知集治監が設置されると、翌年から空知集治監の囚人が幌内炭鉱で使役²³⁾され、1894年〔明治27年〕に囚人労働が廃止されるまで続くことになった。

官営幌内炭礦労働力構成（延数）

区分 年度	総延数	囚 徒		良 民	
		延 数	比率	延 数	比率
1885	176,811	64,982	36.8	111,829	63.2
1886	310,043	169,499	54.7	140,544	45.3
1887	273,041	203,529	74.5	69,512	25.5
1888	297,483	232,211	78.1	65,272	21.9

良民囚徒賃金比較（1人1日平均）

区分 年度	坑 夫		人 夫	
	良 民	囚 徒	良 民	囚 徒
1886	33.8	9.1	31.6	10.7
1887	27.1	6.6	26.5	3.9
1888	29.5	7.3	23.0	5.9

田中修『日本資本主義と北海道』182頁より

幌内炭鉱において囚人は上表のとおり次第に大きな比率を占めるようになってゆく。その理由は、田中によれば、上表の通り一般（良民）坑夫の4分の1程度の賃金にあった²⁴⁾。この低賃金は、官営であった幌内炭鉱が1889年〔明治22年〕北海道炭礦鉄道会社（以下では北炭と略す）に払い下げられた後も続くことになる。つまり、囚人労働は北海道の開拓ばかりでなく、払い下げを受けた北炭の利益にも資することになるのである。囚人労働により利益を上げる政策は、金子の復命書に見られた囚人を低廉な労働力とし、北海道での投資を促すという目的を実現するものといえる。

21) 北海道の集治監の観光資源化については、以下を参照されたい。cf. 古松丈周「北海道の「集治監」をめぐる歴史認識の諸相：ダーク・ツーリズムと近代の他者」旭川大学経済学部『旭川大学経済学部紀要』79・80合併号、2021年3月。

22) 明治政府の北海道、ならびに囚徒に対する考えについては以下を参照されたい。cf. 小池喜孝『鎖塚：自由民権と囚人労働の記録』岩波現代文庫、2018年、114頁以下。

23) 空知、そして釧路集治監の設置場所は、鉱山での使役を念頭に決定されたとも言われる。『標茶町史考』によれば、「空知集治監の幌内炭鉱、釧路集治監の硫黄鉱山に囚人を使役するため、これらの土地が選定せられたことは明らかである」。cf. 標茶町史編纂委員会編『標茶町史考 前編』標茶町、1966年、71頁。

24) 田中修、前掲書、181頁。

1886年〔明治19年〕北海道庁が発足し、初代長官となった岩村通俊は、渋沢栄一ら財界の実力者を招いて北海道開発を協議していた。

程なく囚人労働に対して、人道主義的立場から批判がなされるようになる。そしてその改革は集治監内部から始まったという²⁵⁾。幌内炭鉱についても、囚人労働問題に取り組んだ典獄、大井上輝前の養子で看守として空知に赴任した義近は以下のように述べている。

「空知監獄署²⁶⁾に着任してみると、囚人使役法は全く旧式で、人間扱いをしておらぬ。囚人の大部分は、もっぱら幌内炭坑の地下深い坑内で、不完全な設備の中で、石炭を掘り出すことが主な仕事である。坑内の空気流通も不十分、かつ落盤の危険性もしばしば喧しく伝えられておった状態下で、朝は早く晩は遅く十時間以上も、栄養に乏しい食物を与えられ、重労働を強制せられておった有様であって、懲戒も極端に、人名の価値などは毫もかえりみられておらなかったのである。／＼そこでその使役法を改良すべく、数回其の筋に意見書を提出したが、炭坑業者その他の反対者続出し、改革説は一時難行せしが遂に説得し、上司の採択となり、炭坑の坑内作業を廃止し、専ら地表に於いて人名の危惧なき安全作業に転換せしめ、或いは農地開墾、もしくは土木作業に向け、土地開発に効果ある作業に従事せしむることとなった²⁷⁾」。

囚人労働は政治問題化し、内務官僚にも廃止の意見が起こっていた。囚人労働廃止の動きは様々な攻撃に遭いながらも、紆余曲折を経た末、最終的に達成されたのである²⁸⁾。しかし、強制労働はこれで終わりではなかった。囚人に代わる新たな「不自由な労働者」が準備されていたのである。

第2章 不自由な労働者たち(2): タコ部屋

囚人の使役が廃止されると前後して、北海道では新たな強制労働が広がってゆく。「タコ部屋労働」と呼ばれ、1890年〔明治23年〕に北炭室蘭・夕張線工事で始まり広がったと言われる。「タコ部屋労働」とは、人身売買や詐欺的な募集で集めた労働者を暴力的な監禁状態に置いて自由を奪い、囚人労働に比する方法で強制労働に従事させるもので、逃亡者には凄惨な私刑が加えられた。資本主義成立期に土建業を中心に、鉱山労働、鉄道敷設、港湾労働などに見られた。囚人労働がモデルになったとも言われる。

このタコ部屋には、様々な呼び方があり、監獄部屋、土工部屋という呼称もよく使用されている。

25) 詳しくは以下を参照されたい。cf. 小池喜孝、前掲書、141頁以下。

26) 1887年〔明治20年〕に空知集治監から空知監獄署となり、1890年〔明治23年〕に再び空知集治監となった。

27) 寺本界雄『樺戸監獄史話』月形町、1950年、231頁。

28) 小池喜孝、前掲書、第5章を参照されたい。

また、監獄部屋という呼称は狭義には土建業に用いられ、鉱山については飯場制度²⁹⁾と呼ぶこともあり、九州の炭鉱では納屋制度とも呼ばれる。これらタコ部屋は過酷な労働を強制されたには違いないが、差異も大きく、なかでも炭鉱労働は異なったという³⁰⁾。土建業や鉄道敷設の凄惨さと比べれば、鉱山、そして炭鉱特有の事情が影響していたのである³¹⁾。飯場制度では、請負業者である飯場頭が、簡易の合宿所に労働者を収容監禁し、様々な名目で搾取し、借金漬けにしつつ強制的な労働に従事させた。しかし、この飯場制度は、友子制度に対応する形で、炭鉱の経営者が労働者を間接的に雇用する制度であった³²⁾。友子制度とは、江戸時代から近代まで続いた鉱山労働者の相互扶助組織であり、傷害、不具、廃疾などの場合に扶助を受けることを可能にするもので、一種の身分制度のなかで技能の伝授なども行われたという³³⁾。つまり、飯場頭は中間搾取者であると同時に、友子制度から見れば、鉱夫のリーダーとして鉱夫の利益を代表する側面も有しており、飯場が経営側に対抗する拠点にもなりえたのである³⁴⁾。

そのためもあって、炭鉱経営の発展とともに、経営側から見れば、飯場制度は経営者の統括を阻害する要因と考えられるようになってゆく。ほどなく、経営側は直轄制度の導入を画策するようになる。北炭は、早くも1893年〔明治26年〕に飯場制度の廃止、直轄制度への移行を試みた。このときはすぐに飯場制度が復活することになる。もっとも、小池によれば、「飯場制度の“廃止”は表向きで、飯場制度をこわして抵抗力をうばった上で、飯場頭のピンハネ料7%を上廻る平均10%の賃下げを行った。そして全山丸抱えの飯場に組織替えたのである³⁵⁾」。その後、北炭は1903年〔明治36年〕に再び飯場制度の廃止方針を決定し、飯場を買収して単身者の寄宿舍にすることで飯場制度の廃止を進めた。1916年〔大正5年〕に飯場制度は廃止され、寄宿舍制度となったのである。

江戸時代から続く友子制度、そしてその上に築かれた飯場制度、これら前近代的システムから近代的な資本主義的生産関係に移行する時代、国内各地の炭鉱でストライキや暴動が頻発するようになっていた。空知地方でも、1900年〔明治33年〕、1905年〔明治38年〕に夕張炭鉱、1903年〔明治36年〕、1907年〔明治40年〕3月に幾春別炭鉱で労働争議が発生していた。その多くに共通しているのは、鉱夫の虐待など人権を無視した使役にあり、待遇改善を求めるものであった。幌内炭鉱でも、

29) 飯場制度は狭義には金属鉱山に用いられ、炭鉱については納屋制度と呼ぶこともある。この納屋制度とは炭鉱の経営者が労働者を直接雇用せずの間接的に雇用する制度である。筑豊炭田をはじめとする九州の炭坑に使用することが多い。

30) 北海道総合文化開発機構、前掲書、43-45頁。

31) 炭鉱では産業革命の進展とともに機械を導入し、生産性を上げていったが、採鉱部面の機械化を実現することができず、手工業の熟練性を強めたことが、友子制度、そして飯場制度に頼らなければならず、友子制度が急速に普及した原因と考えられる。cf. 村串仁三郎「明治期における友子制度普及の必然性：日本鉱山業の確立過程における友子制度の考察（二）」法政大学経済学部学会『経済志林』53（1）、1985年7月、34頁。

32) 北炭では、飯場頭が友子制度や縁故を利用して鉱夫を集め、当初は東北地方の金属鉱山出身者、経営規模の拡大に伴い東北地方の農民の比重が高まったという。

33) 友子制度の詳細については、以下を参照されたい。村串仁三郎『日本の鉱夫：友子制度の歴史』世界書院、1998年。

34) 市原博「戦前期北海道炭鉱労使関係の展開」北海道社会学会『現代社会学研究』3巻、1990年、94頁。

35) 小池喜孝、前掲書、227頁。

1907年〔明治40年〕3月から4月、幌内炭山暴動が起こる³⁶⁾。この暴動は、賃上げ、待遇改善交渉から暴動に発展したもので、鉱長や下級係員に対する反発ではじまった。経営側による直轄制が進むにつれて、その直接的な担い手であった下級係員の権限拡大、専横が強まっていた。下級係員は、飯場頭に代わり、鉱夫に金品を要求し、生活に干渉するようになったため、下級係員に対する鉱夫の反発は強まっていたのである³⁷⁾。そして交渉のなかで、飯場頭、友子親分が主導権を掌握しようとするなかで偶発的に暴徒化していったという。その鎮圧のために、最終的に警官隊が投入され、数組の暴徒と警官隊が衝突し、乱闘となったのである。

幌内炭山暴動での待遇改善要求について、供野は住宅改善の矢面となったのが監獄長屋だと指摘している³⁸⁾。長屋は、空知集治監の囚人を収容するための仮監獄として、1882年〔明治15年〕秋から建築された。その後、炭鉱事業が拡大し、使役される囚人が増えるのに伴って長屋は増築された。1894年〔明治27年〕に囚人労働が廃止されると、北炭はこのうちの2棟を富山県、石川県出身者の鉱夫長屋に転用したという。その衛生状況は極めて劣悪なものであった。2棟の暴動当時の状態について、供野は当時の『北海タイムス』の記事を紹介している。そこには以下のようにある。

「2棟の長屋の如き、其不潔さ加減、如何に鼠目に見るも宛然乞食小屋の如し。其排水溝の溢れてベチャベチャと泥濘を極め、奇臭鼻を衝きて足踏みならざる処、是より夏向きに至り沸々として蒸されたらんには如何ならんと気遣はれたり、当区（註、札幌区であろう）に於ける最下等の貧民窟も彼の坑夫長屋に比すれば数段上層に位せり³⁹⁾」。

ここで垣間見られる鉱夫たちの環境は、「乞食」と変わりなく、札幌の「最下等の貧民窟」よりもはるかに劣悪なものだったのであり、頻発する労働争議のなかにそのことが示されている。

1913年に経営権を握った三井は、経営改革を進め、下級委員では鉱夫を統括するには不十分だとして、結局、旧飯場頭などの親分的存在に依存し続けることになった。そうとはいえ、ほどなく、北炭では1916年〔大正5年〕に飯場制度が廃止され、寄宿舎制度となった⁴⁰⁾。飯場制度は解体し、鉱夫は企業に直接雇用されるようになる。友子制度は根強く存続していたが、以前と比べれば弱体化していた。このような事態を前にして、多くの炭鉱では労使関係は新たな段階に入ってゆく。し

36) 詳細は、以下を参照されたい。cf. 供野外吉『幌内炭山暴動始末』みやま書房、1975年。また、供野の研究を参照しつつ、監獄部屋を検討したものとして、以下の研究が参考になる。cf. 内藤辰美「都市と炭鉱：都市小樽の経済的成長と幌内炭鉱の労働者」日本女子大学社会福祉学会『社会福祉』第54号、2013年、6頁以下。

37) 市原博、前掲書、97頁。

38) 供野外吉、前掲書、70頁。

39) 同上書、70頁。

40) 村串によれば、1907年〔明治40年〕の足尾、別子、幌内の炭山暴動は再生しかけた鉱夫労働組合運動ばかりか社会運動全体を抹殺し、暗い谷間の時期が到来した（cf. 村串仁三郎「足尾銅山における友子制度の変遷（下）」法政大学経済学部学会『経済志林』60（3・4）、1993年3月、2頁）。

かし、幌内炭鉱の労働運動について、幌内炭山暴動以降、管見の限りではそれほど詳しい記述は見られない。第一次大戦後、1919年に結成された全国鉱夫組合は、新人会⁴¹⁾出身の知識人と鉱夫が提携し、全国の鉱夫を組織化することを目的とした労働組合で、鉱夫の主張により、友子同盟を利用して組織化を進めていた⁴²⁾。もっとも北炭の多くの炭鉱でその活動は穏健なものであり、戦後の好景気の中で労使協調路線を歩むことになった。経営側は労働組合運動の勃興を前に労使関係を再編し、鉱夫の団結と労働条件に関する発言権を認めざるをえなくなった⁴³⁾。そしてそれに対抗するために従業員団体を上から組織化した。この疑似協調関係が1920年代に定着したという。

第3章 産業遺産のストーリー

これまで近代化のなかで幌内炭鉱における労働者の置かれた状況を概観してきた。そこには囚人労働、タコ部屋労働という資本の本源的蓄積下での強制された労働が存在した。これら強制された労働は、資本主義化の一段階として、それに加えて植民地に見られる「近代的な賃金制度と本源的な支配諸関係との極めて奇妙な混合形態」として成立した労働形態であった。また、本稿では検討することができなかったが、第二次大戦中には、朝鮮半島、中国から「強制連行」された人々による労働も存在した⁴⁴⁾。これら「強制、詐欺、抑圧、略奪が隠蔽すらされず公然と行われ」る事態は、現代においても資本主義の周辺部において見受けられるものであり、ケビン・ペイルズが「現代奴隷制⁴⁵⁾」と呼ぶものと重なり合う。その意味で現代も資本主義を支えている労働形態である。このような歴史的記憶は、近代化の影の部分を示すものであり、「暗い炭鉱」イメージの大きな構成要素となっている。

強制された労働と深く関係し、炭鉱イメージを考える上で、もう一つ確認しておかなければならないことがある。それは、多発してきた事故についてである。次表のとおり、死亡者100名以上の事故だけでも頻繁に発生しているのがわかる。これより死亡者数の少なかった事故、記録すらされなかった事故を含めれば、炭鉱には無数とも言える事故が発生してきた。戦後、安全対策が進み労働環境が大きく改善された後も、頻度は減ったものの、大きな事故が幾度となく発生している。事故が相次ぐ「危険な炭鉱」イメージもまた、「暗い炭鉱」イメージの構成要素のひとつと言えよう。

さらに近代の炭鉱事故は、「暗い炭鉱」イメージを超える特有の性質を有している。木村は、以下

41) 1918年〔大正7年〕に、赤松克麿や吉野作造らの援助を受けて結成された東京帝国大学を中心とする学生運動団体。1929年〔昭和4年〕に解散した。

42) 市原博、前掲書、98頁。

43) 市原博「第一次大戦後の北炭の労働運動対策」経営史学会『経営史学』19(2)、1984年、57頁以下。

44) 幌内炭鉱における朝鮮人労働者についての概略は以下を参照されたい。cf. 北海道開拓記念館編、前掲書、44頁以下)。なお、「強制連行」以前に朝鮮半島から炭鉱にきた人々は多数存在しており、「強制連行」も含めて稿を改めて検討したい。

45) ケビン・ペイルズ(大和田英子訳)『グローバル経済と現代奴隷制：人身売買と債務で奴隷化される2700万人』2014年、第1章を参照されたい。

のように言っている。

「皮肉なことに、地下深くまで堅坑を掘り、巨大な捲揚機によって労働者や物資、石炭を輸送する技術、およびそれを可能とする資本を有した大手炭鉱ほど、大事故のリスクに肉薄することになったのである。もっとも、炭鉱労働従事者であれば、炭鉱というものが死の「危険」と常に隣り合わせの現場であったことは少なからず意識していたことではあろう。しかしながら、ここで重要なのは、深部に到達し、複雑化した近代の炭鉱においては、あくまで大事故による大量死という事態は、一般の個々の労働者にとってはほぼ予測不能なものだったといえるだろう。ゆえにその死は「非業性」を強め、近代社会にとって適切に意味づけられ、記憶されなければならないものとなるのである⁴⁷⁾。

死の「非業性」とは、死の方には予測された死と予測されなかった死があり、その区別にもとづくもので、「非業の最期」とは「思いがけない災難などで死ぬこと」を意味する。つまり、病死や老衰

による通常の死（＝予測された死）ではなく、事故や殺傷行為、戦死などの「異常な死」を意味している。そして近代において、科学技術の発達、社会の複雑化によって、死の「非業性」が強化されてきた⁴⁸⁾。囚人労働、タコ部屋などでの虐待による死、そもそも囚人労働やタコ部屋労働そのものが恣意的で理不尽な暴力によるいわば「思いがけない災難」であり、その意味でこの「非業性」に通じるものがある。そして個人にとっては「思いがけない災難」であるこの「非業の死」を、近代資本主義はシステムの不可欠な要素として必要としてきたし、現在も必要とし続けている。それゆえ「怖い」、「危険」などの「暗い炭鉱」イメージを超えて、この「非業性」が炭鉱労働を近代社

死亡者100名以上の炭鉱事故

発生年	炭鉱名	事故の内容	死亡者数
1899	豊国	ガス炭じん爆発	210
1906	高島	ガス炭じん爆発	307
1907	豊国	ガス爆発	365
1909	大之浦	ガス炭じん爆発	256
1912	夕張一坑	ガス炭じん爆発	267
1912	夕張一坑	ガス炭じん爆発	216
1913	二瀬	ガス炭じん爆発	103
1914	若鍋	ガス爆発	422
1914	方城	ガス爆発	687
1915	東見初	海水浸入	235
1917	大之浦	ガス爆発	369
1920	夕張	坑内出水	209
1927	内郷	坑内火災	134
1938	夕張	ガス炭じん爆発	161
1941	三菱美唄	ガス炭じん爆発	177
1942	長生	海水浸水	183
1944	三菱美唄	ガス爆発	109
1963	三池	炭じん爆発	458
1965	山野	ガス爆発	237

通産省『鉱山保安年報』より⁴⁶⁾

46) 木村至聖「近代産業における「非業の死」はいかに記憶されるか」日仏社会学会『日仏社会学会年報』26、2015年、20頁より転載。

47) 同上書、20-21頁。

48) 死の「非業性」の意味については、同上書、18-19頁に依っている。

会に適切に意味づけ、記憶されねばならないものになっているのだ。

しかし、炭鉱遺産を観光資源として記憶する取り組みは、多くの場合位相を異にする。近代の産業遺産、そして炭鉱とそれに付随する様々なインフラの整備、日本遺産に選定された「炭鉄港」の構成文化財は、北海道の、そして日本の産業革命を支えたもので、現代社会の礎となったものとして以下のように説明されている。

「開拓使が設置された1869年からわずか150年という短い期間で、5万人弱だった人口が100倍近く増え、豊かな社会を達成した北海道。／その歴史をひも解くと、空知（石炭）、室蘭（製鉄）、小樽（港湾）とそれらをつなぐ鉄道を舞台に繰り広げられた、産業革命の物語が見えてきます⁴⁹⁾」。

また、「炭鉄港」の説明には、以下のようなものもある。

「北海道は、明治初期から昭和の高度成長期までの100年で、人口が100倍となる急成長を遂げました。／薩摩藩の島津斉彬が構想した「北門の鎖鑰（さやく）」、開拓使が主導した「殖産興業」、日露戦争による「新たな領土」、太平洋戦争の「国家総動員」、その後の「経済復興」と、《炭鉄港》の歴史は、時々の国の政策に沿って日本が近代国家として自立・発展する過程を一身に体現しています。／その中核となったのは石炭というエネルギーであり、そこから派生する鉄鋼・港湾・鉄道を含めて、歴史をたどるための手がかりは100km内外の範囲に多数存在しており、世界遺産「明治日本の産業革命遺産」のサブストーリーとも言えます。／これまで100年にわたり日本で最も忠実に《近代》を実践してきた足跡を顧みることは、今後100年の日本の進路を考える上で、極めて意義深いものがあります⁵⁰⁾」。

開拓が進み、産業革命をとおして発展し、「豊かな社会」を手に入れた北海道。明治以降の開拓、そして近代産業革命の成果を強調する、近代資本主義社会から見た、いわば「光」の物語である。

その近代資本主義の不可欠の要素である「暗い炭鉱」の悲劇も当然のことながら忘れ去られてはならず、この「光」が生み出した「影」として、表裏一体のものとして位置づけられる。「炭鉄港」の構成文化財には、月形町の「旧樺戸集治監本庁舎（現在の月形樺戸博物館）」や「空知集治監典獄官舎レンガ煙突」が「北海道の開拓を担った功労者」として登録されており、また「北炭新幌内鉄坑口」は「三度のガス爆発の末の大炭鉱」として登録されている。そして「豊かな社会を達成した

49) 空知総合振興局「炭鉄港HP 炭鉄港ストーリーのページ」<https://www.sorachi.pref.hokkaido.lg.jp/ts/tss/tant-etsukostory.html>（2021年10月26日閲覧）。

50) 炭鉄港ポータルサイト<https://3city.net/>（2021年12月26日閲覧）。

北海道」のストーリーのなかで「犠牲者」は近代化の「功労者」に位置づけられる。「豊かな社会を達成した北海道」からみれば、「日本が近代国家として自立・発展する過程」からみれば、資本の本源的蓄積下の「強制された労働」が北海道を開拓し、富の蓄積に寄与したことはまぎれもない事実であり、「犠牲者」を「影」から救い出すには、それを尊い犠牲とすることになるのだろう。「非業の死」を近代社会の記憶するために、「想像の共同体」のために亡くなった無名の人々として追悼しようとするのである⁵¹⁾。

第4章 産業遺産へのまなざし

炭鉱遺産に示されたストーリーは、歴史的記憶をいわば現代の資本主義社会の肯定的側面を達成したものとしてみれば、観光客が前にする炭鉱遺産を歴史的に位置づける。そして現代社会の礎になった「影」を「功労者」として追悼する。このようなストーリーは「近代化論」に見られた経済発展の物語として歴史を理解する道を開くものであり、近代資本主義社会の「光」と「影」として、それなりのリアリティーもあるのだろう。

しかし、そこに示されたストーリーは、炭鉱に生きた人々のリアルな歴史ではない。ましてや「犠牲者」のストーリーではあり得ない。幌内炭鉱において、暴力により「強制された労働」は、そしてその結果としての死は、「犠牲者」からみれば未来の「豊かな社会を達成した北海道」のためのものでもなければ、「世界遺産「明治日本の産業革命遺産」のサブストーリー」でもない。「犠牲者」からみれば、その「影」が現実にはならず、「犠牲者」の前に立ちはだかった企業の背後の見えない「影」にあったのは、暴力的な「資本の本源的蓄積」であり、現代社会の肯定的側面を達成した「近代化」だった。そのとき、「犠牲者」にとっての「光」とは何であったのか、「犠牲者」の歴史的記憶を辿るために、その「光」が明らかにされなければならない。それは聞くことがかなわない犠牲者の声を聞くことからしか明らかにはならないであろう。しかし「暗い炭鉱」と「明るい炭鉱」を分かつものは、この「光」を明らかにすることによってしか理解されえない。それゆえ、その声を聞くことはできなくても、何らかの痕跡を探さなければならない。

そこで注目されるのが、炭鉱の歴史に刻まれた友子制度である。明治期、近代化の過程で友子制度は広範に普及したという。炭鉱遺産においても、友子制度を伝える展示物は多い。幌内炭鉱のあった三笠市の三笠市立博物館は「友子の免状(証紙)」を展示し、「三笠市弥生墓地友子の墓ガイドマップ」を製作している⁵²⁾。企業が炭鉱を統括するのに利用する、あるいは利用せざるを得なかつ

51) アンダーソンによれば、無名の人々の死は「国民的想像力」に満ちており、宗教的想像力と親和性をもっている。cf. ベネディクト・アンダーソン(白石隆、白石さや訳)『定本 想像の共同体: ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山、2007年、32頁以下。なお、炭鉱での「非業の死」について、「慰霊碑」、「記念碑」を検討したものとして、前出の木村の論文を参照されたい。cf. 木村至聖「近代産業における「非業の死」はいかに記憶されるか」21頁以下。

52) 三笠市立博物館「友子の墓ガイドマップについて」<https://www.city.mikasa.hokkaido.jp/museum/detail/00006129.html> (2021年10月27日閲覧)

た一方で、企業に抵抗する拠点となり、労働組合にも影響を与えることになった。村串によれば、友子制度のもとで、維新期の政治的混乱、維新政府の文明開化政策、そして鉱山の近代化政策を経験し、鉱夫は社会的自覚を高め、同職組合意識を高めることとなった。さらに、友子制度は鉱夫の労使関係についての自覚や社会主義的意識と結びついて労働組合的傾向をも生み出していたのである⁵³⁾。前近代的ともいえる職能集団の上下関係と相互扶助が、その人間のつながりが近代的な搾取とそれに対する人間としての抵抗の拠点ともなったのである。そこに「思いがけない災難」である「非業の死」を強制した恣意的で理不尽な暴力を拒絶しようとした、非合理的な社会に対するための「光」を、「犠牲者」たちの失われた希望を探すことができると思われるのだ。

もっとも、観光客が炭鉱遺産を見てまわったとき、このような歴史の一端に触れることはできても、理論的な歴史認識や人々の記憶を理解することは困難である。他方で、その遺産にまつわる歴史は様々な形で紹介されており、そのような知識がなければ、炭鉱遺産を認識することも困難となる。しかし、そのどれもが遺産そのものではなく、遺産を何らかのストーリーに調和させ、位置づけるものである。しかし、これら実際の歴史遺産にふれることで、自らの歴史認識を揺さぶるきっかけを得ることは可能である。歴史遺産には、そこに示されたストーリーや自らの歴史的知識では語り尽くせないものが示されているからである。幌内炭鉱景観公園を訪ねれば、朽ち果てた幌内神社、閉鎖された音羽坑、生い茂る木々、冬ともなれば一面の雪のなかにこれらの遺産をみることになる。観光客は炭鉱遺産をみて、何を感じるのか。その遺産を観光資源とする地域は、そこで何を表象し、語りかけようとするのか。その絡まりあいを解きほぐしてゆくきっかけは、その歴史遺産にこそ見いだされるからである。その体験を期待して、観光客は歴史遺産を訪ねるのであろう。

それに加えて、幌内炭鉱をはじめとする北海道の炭鉱遺産は、もうひとつの意味を提示している。赤平町でのフォーラムで、吉岡は以下のように説明している。

「炭鉄港の歴史と人口推移をみると、小樽や室蘭の人口は第2次世界大戦時と現在が同じくらい。空知管内は明治初期と同じくらい。ということで日本全体がこれから50年後に迎える人口減少の時代を『すでに起きた未来』として空知管内は体験している。自分たちの未来を考える機会として空知管内をみる事ができる⁵⁴⁾」。

炭鉱の廃墟にたたずみ、まちを観光すれば、現在のなかで「すでに起きた未来」をみることになるのである。戦後、高度経済成長のなかで、恣意的な暴力による「強制された労働」を脱し、近代社

53) 村串仁三郎「明治期における友子制度普及の必然性」55-60頁。

54) 根室本線対策協議会『鉄道フォーラムin赤平』実施報告書<http://www.city.furano.hokkaido.jp/docs/2018011100020-/files/9975498.pdf> (2021年12月26日閲覧)。この文章は、吉岡宏高の講演「鉄道の果たす役割～日本遺産「炭鉄港」に学ぶ～」の講演要旨に拠っている。

会の「光」を幾分なりとも享受することができた炭鉱の日常とその崩壊である。そこで遠くに垣間見るのは人々の生活がかつて存在したことであり、観光客は現在のなかにみえる過去と未来、「暗い炭鉱」のストーリーには収まり得ないものを感じ、思いを馳せることはできるのである。そしてそこにあったのは、「犠牲者」たちが日常の生活のなかに見ようとした希望の痕跡でもあるだろう。

おわりに

「暗い炭鉱」に対して「明るい炭鉱」を示している吉岡は、「何が「暗い」と思わせるのか？」と問いかけ、直接的（即地的・視覚的）な「暗さ」以上に、「間接的なイメージ」、すなわち「新聞やテレビといったマスコミ報道が、世間一般のイメージ形成に果たす影響は大きい」として、以下のように言っている。

「日常の炭鉱での生活、少なくとも私が育ってきた北海道空知地域の炭鉱住宅では、独特かつ濃密ではあるが、しっかりとしたコミュニティが息づいていた。しかしテレビは、そのような平坦な日常は対象にせず、ただ炭鉱事故と閉山の時だけやってきて、人々の悲しいシーンを深く鋭く切り取ってゆく。これでは、実際の炭鉱を知らない視聴者の立場から見ると、いつも炭鉱では人が泣き叫び怒りが渦巻いていたようにしか思えなくても仕方がなからう⁵⁵⁾」。

もともと、安本末子『にあんちゃん：十歳の少女の日記⁵⁶⁾』を原作とした今村昌平監督の映画『にあんちゃん』（1959年）を、つらい現実を直視しつつたくましく生きようとする姿に共感し、その理由をそこに暮らした経験をもとに描くことに求めている。この原作は、佐賀県の炭鉱地帯に育った安本末子の10歳の頃の日記である。真正の経験に根ざした真実の姿とすることができるだろう。

「観光のまなざし」が「非日常」を求めるのは事実である。その意味で観光客にとって「非日常」ともいえる「暗い炭鉱」を求めるのは当然かもしれない。近年、ダーク・ツーリズムと呼ばれるようになった「悲劇の地」をめぐる観光も、その暗さが観光客を引きつけている側面もあるだろう。

その一方で観光客はマキャネルの言うように、本物の、真正性の経験を求めている⁵⁷⁾。「濃密ではあるが、しっかりとしたコミュニティ」、それは友子制度に見られた相互扶助であり、友子制度を拠点として「犠牲者」たちが非合理的な社会に対抗し、得ようとした「平坦な日常」でもあるだろう。そしてそれもまた伝統、文化、そして日常生活が形骸化した近代的人間にとっては非日常であるかもしれない。「舞台化された真正性」としての近代化の神話とその神話性を批判する「暗い炭鉱」

55) 吉岡宏高『明るい炭鉱』186頁。

56) 安本末子『にあんちゃん』（1958年）角川文庫、2010年。

57) ディーン・マキャネル（安村克己、須藤廣、高橋雄一郎、堀野正人、遠藤英樹、寺岡伸悟訳）『ザ・ツーリスト：高度近代社会の構造分析』学文社、2012年、第5章。

幌内炭鉱をめぐる追想の布置連関－資本の本源的蓄積と産業遺産－

の現実とともに、かつてホスト社会に存在した日常生活もまた、観光客が求める「真正性」を有しており、そこに「明るい炭鉱」としての炭鉱遺産を訪れる意義があると思われる。